

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第四十二号 (二〇〇九年十二月)

風に吹かれて(09 12) 白井啓治

『立ち止まれば風の居る 師走のやって来る』

随分一生懸命に走ったな、と立ち止まったら、風が吹いて来て今年もあと少しで終わりだ、と囁いた。

風の囁きに唆されたわけではないが二〇〇九年という年を振り返ってみると、…そう、概ね良い年であったと言える。特にこの風の会にとっては、良い年であった。三周年という節目を無事に迎えたこともあるが、三年間にわたって欠けることなく月一回発行してきた一つの成果ともいえる嬉しい反響を頂けるようになってきたことである。

先月、四十二号でのことである。兼平ちえこさんが、昨年春に「霞ヶ浦、常陸国風土記を歩く」の皆さんのおともをして石岡市の歴史巡りウォーキングされた時のコースを19回にわたって連載され、先月号で終了した。

兼平さんは、歴史巡りの解説に石岡市教育委員会発行の石岡の歴史などを資料としてまとめられたのであるが、その内容について時々読者の方々からご指摘を頂いた。これは会報を出している者としては大変嬉しく思うものである。

兼平さんへのご指摘の多くは、崙書房の太田尚

一氏(本来ならば名を伏せるべきなのであるが、ふるさとの歴史・文化への思いを共有されており、当会へも投稿頂いているので敢えて書かせていただきます)で、「兼平さん嘘書いてはダメです」といった言葉で、その都度「何故ならば」の資料をお送り頂いている。

小生も、この会報にことば座に書く朗読舞劇の脚本予告をする、この資料をお読みですか、とお送り頂き、大変に助かっている。

これは石岡市に限ったことではないのであるが、県や市などの教育委員会といったところの編纂した地元の歴史書に感心するものは殆どないと言っている。小生口が汚いのでこんな言い方をしてしまうのだが、大半が権威主義的な史家を中心として、ご都合主義的に願望を事実置き換えたようなものも多く、そこには『**真実としてのドラマ**』を見る事が出来ない。これでは若者達が古里の文化に目を向け、愛着を持つことができなくても当然であろうと思う。

兼平さんは品行方正真面目一方の方だから、歴史ご案内の解説を石岡市史に求めてしまう。本当はそれが正しいことなのであるが、その内容を見ると「常陸国風土記」の内容が正しい歴史の真実である、と鵜呑みにするようなものである。諸国風土記の内容は勝者の視点、都合で書かれたもの

で、事実からは遙かに遠いものである。だが、事実としての歴史ではなく、歴史物語としては重要な文化財ではある。そんな訳で、兼平さんは太田氏から電話が入ると戦々恐々となるのである。そして、市史を見て書いたのに、…と首をひねるのである。

先月号でようやく石岡歴史巡りを終了しホッとしている所へ、太田氏からまたまた嘘書きちゃダメです、との応援のお電話を頂いた。兼平さんはまたショック。しかし、この話を聞いて、打田さんから原稿が届いた。こうした言葉の往還は実に嬉しく、楽しい出来事である。

今月号は、三周年展と、本年度の総括を書かねばと思っていたのでちょうど良い。兼平さんの原稿を見て太田さんのご指摘があり、それに対して打田さんが太田さんへの返礼と所感の原稿。太田さん、打田さんのご意見を聞いて兼平さんの今月号の原稿。これこそ風の会の掲げている「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」そのものである。編集を任されている小生にとっては、実に嬉しく、愉快なことである。

打田さんからの原稿は二本届いた。短いもので両方掲載したいと思う。

## ① 二つの佐志能神社

「ふるさと“風”」の第四十二号まで、兼平ちえこさんが市の歴史ガイドとして遺跡を探究される方々へのご案内をされた場所を紹介している。

最終回は石岡市が誇る龍神山の欠片と、村上・染谷両集落に祀られる佐志能神社であった。私は当時の人々がどのように生きたのかに関心があるから遺跡や社寺楼閣の類を見ることは少ないので

兼平さんの紹介記事には教えられる。

今回、取り上げてくれた「二つの佐志能神社」は目と鼻の先に同じ名前前で祭日も同じ、祭神も似た様な神社で、途中から分村に伴い分離したと言われる。勿論、兼平さんは石岡市史を引用されているので改めてそれを読み直してみると「三代夷録」に官位を授けられた記録が残る村上社は尤もらしいが、染谷社の由緒はどうも不自然である。

「染谷佐志能社は「承和四年（八三七）三月仁明天皇のとき常陸国新治郡佐志能神社に預かる、祭神豊城入彦命、崇神天皇の子御母、紀国造荒河戸の女、勅命を奉じ東国を鎮定の大功をたてたので子孫東国の国造に任ぜられる者が多かった。」云々で、子孫が新治国造になった際に祖先を顕彰するために建てられた神社だと説明しているのが分村分離の経歴と龍神山の伝説に合わない。

特に太字部分が意味不明だったが、郷土史の専門家である崙書房の太田尚一さんから兼平さんに「染谷佐志能神社の由緒とされているのは、古代の新治国に伝わる佐志能（佐白）氏の手柄話を牽強付会したもので、この地域の歴史ではない」とする趣旨のご指摘を頂いたことを伺ったので私も市史の奇妙な表現の意味が分かった次第である。

（御教示に厚くお礼を申し上げます）

つまり、村上神社から分離した染谷の神社は何らかの事情で一時的に笠間の佐志能神社（佐白山正福寺）に預けられたか、或いは経緯は不明だが古代の新治国が置かれた笠間地方の伝説が誤って伝えられたかであろう。笠間・城里・水戸の堺にある朝房山が、龍神山と同じ晡時臥山（くれふしのやま）伝説を持っているので混同する可能性はあると思われる。

石岡市教育委員会が出している「石岡の地誌」や地元で伝えられる話では、かつて村上集落から染谷地区が分離独立したため、信仰していた神社も二分したのだが、その時期は江戸時代と記録にあり「国造」が登場する古代ではないらしいから、双方の由緒が違うのは不自然なのである。本来は一つだったものが二つになって元の歴史が変わるといえるのは筋が通らない。そう言う部分をキチンと正していかなければ、太田さんが指摘されたような石岡には関わりのない伝説が入り込むことになるのであろうか…。

龍神山麓の辺りは怪奇な伝説が残るくらいだから昔から境界が入り乱れていたらしく裁判沙汰まで起きており、支配者も頻繁に変わって神社はその度に影響を受けていたのであろう。仏教の強大化で神社が支配下に置かれたことも、歴史が正しく伝わらなかった一因と思われる。佐志能神社は本来「村上神社」という由緒正しい神社である。その起こりは、大和三輪山に伝わる蛇神伝説にある。三輪の神を祀る「みわかみやま」から「むらかみやま」になり、清らかな水が湧き出る聖地として丹生川上の高竈と吉野下市の閻魔の二神が祀られ「子は清水」の伝説が伝わり古代の酒造が行われ石岡が酒造りの町になる。

此処まで書いてきて「佐志能」を忘れようとしたのだが「石岡の地誌」に気になる記事が有ったのを思い出した。石岡市石川地区に居た大掾一族が天慶の乱で平将門の軍勢に攻め込まれた。その時に石川地区が焼かれて神社、寺院が廃墟となり石川氏が滅亡した。焼かれたのが「指野（さしの）神社」で祭神が「佐志能大権現」と言う。どういう神様かは知らないが、染谷と石川地区とは恋瀬

川の上下流であるから交流も可能であるし、両方とも大掾氏が支配した土地であったと思われる。

そうなると、分村・分離説も疑わしくなり染谷の佐志能神社は元来、大掾氏が信仰していた神社に笠間地方の伝説が誤って伝わったもの。そして村上の佐志能神社は仏教の興隆で衰退したが古くからあった村上神社であり、一旦は消滅したが明治時代になって染谷・佐志能神社から分祀したということも推定できるのである。従って、石岡市史に「佐志能は佐白の転訛」などと決めつけて済ませておくのは勿体ないことになる。

個人的所感だが、商店街の出店では無いのだから近くにある二つの佐志能神社のうち、染谷にあるのが「佐志能神社」で、村上の佐志能神社は原点である「村上神社」に戻すのが本来では無かるうかと思う。しかし肝心の三輪神の山である龍神山が忽然と消えてしまった現代では、罰当たりな意見ながら「どうでも良い」と言うほかはないのである。（神様、ごめんさい）

なお石岡市史に佐志能神社祭神・豊城入彦命の母親を「紀国造荒河戸の女」としているが、古事記、日本書記では「荒河戸辨（畔）あらかわとべ」さんになっている。せめて名前ぐらいはきちんと伝えてあげないと…。

## ② 龍神山と佐志能神社

「山高きが故に貴からず」日本の国土は約七十五%が山地だそうですから山は至るところに在りますが、その中から特に神の宿る聖地として選ばれるにはそれ相応の理由がある筈です。合併前の石岡市には山らしい山が龍神山一つしかありませんでしたが、その地形、姿形、雰囲気、景観、自

然環境、ご利益、四季の変化が条件に叶い、古代から伝えられた伝承と相俟って千数百年の間、龍神山は周辺の人たちに親しまれ崇められてきたのでした。

ところが人間に不幸があるように山や神様にも運不運があるようで、龍神山とそこに宿る神は実に気の毒な経歴を背負っているのです。「龍神山」も山麓に祀られている「佐志能神社」も、その権威を裏付ける戸籍が失われかけているからです。それどころか、龍神山はその存在さえも全面否定されそうになっています。これを不運と言わずして何と言いましょか。

龍神山が背負ってきたのは、大和朝廷発祥の地である奈良盆地の三輪山に興った「蛇神伝説」であり、これは古事記などにも記載されていますが、稲作文化の普及と王朝勢力の東征に伴い常陸国の「晡時臥山（くれふしのやま）」に伝えられてきた怪奇な物語です。実は、その晡時臥山が龍神山の他にもあって、どちらが本当なのか意見が別れているのです。

常陸の国は蝦夷に備える重要な国でしたから、この地方が開発される際に物部氏や出雲系、さらには中臣系などの武将たちが次々と送られて来たために「茨城郡」が成立する過程が段階的だったと考えられています。つまり県庁の移転と同じように初期の茨城郡と完成期の茨城郡があり、石岡は完成期の茨城郡だったこととなります。したがって、どちらが本物だという議論ではなくて、両方に共に本物だとすれば良いのですが、どうしても黒白をつけたい専門家もいるらしく龍神山は長い間、落ち着いた暮らしが出来ずにいるのです。そして「龍神山」という呼び名は晡時臥山伝説

が定着してから付けられたように思えてなりません。古代には三輪の神様の山、「みわかみやま」とよばれ、それが訛って「むらかみやま」になったと推定しています。そう考えれば龍神山こそ晡時臥山だと言い切れるのですが、誰も言っていないようです。

一方、龍神山に祀られている「佐志能神社」も二社あります。稲荷神社とか八幡社のように、その時々地元の人が勧請してきて神社が各地に増えていくのですが、佐志能神社の場合は叫べば聞こえるほどの距離に祭神が異なる二社が鎮座しており、その祭日が両方四月十九日というのは少し不思議です。

石岡市史には、なぜ二社があるのか肝心なことを説明していませんが地元の伝承や他の史書や村上に置かれ、祭神はこの地域に東征して功績のあった「豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）」、さらに高麗・閩麗（たかおかみ・くらおかみ）を併せ祀っていたのです。これは龍神山に滾々と水が湧き出ていたことから農耕に不可欠の水神・雷神として雨乞いを司る古代の名族・葛城氏が吉野山中に祀っていた神を勧請したものです。村上神社は仁明天皇の承和四年（八三七）には官社に列し、光孝天皇の仁和元年（八八五）、従五位の上に叙されています。諸国大名と同等の官位です。このことは、かの天神様こと菅原道真らが編纂した「三代実録」に記録されています。石岡にある他の神社など足元にも及ばない格式でした。村上という古代の集落は「村上千軒」とか「百の姓」とか言い伝えられるように大きな村でした。龍神山麓の豊かな水資源に支えられ栄えていまし

た。絹織物が生産され、また、室町時代に入ると木綿が普及してきましたので、それに色を着ける「藍染職人」が必要になります。山麓の水や「子は清水」伝説の泉から沸く水を恋瀬川に流す「高根川」の川岸台地に、いつの頃からか染物職人の集団が住み着くようになり「染屋」と呼ばれていました。

染屋の人口は増え、染物には多量の水が必要ですから、高根地区から水の豊富な龍神山麓へ移動をしてきます。その頃、茨城南郡の村上地区は石岡城にいた大掾（だいじょう）の一族が支配していましたが、鎌倉にいた室町幕府の関東公方（かんとくほう）に抵抗したため、主の満幹（みつもと）が鎌倉で殺害されて、家名は存続しませんが大掾氏は滅亡寸前の状態だったのです。

染屋職人の集団が住み着いたのは村上地区の一部でしたが、石光名（いしみつみょう）という小規模な荘園内でしたから、恐らくは大掾氏の衰退に乗じた領地の移動があったのでしょう。染屋職人の居住区が村上から分離させられたのです。「染谷」となったのもその頃でしょう。そして染谷は茨城北郡に含まれたのです。時代は室町中期、西暦一四〇〇年代の半ばと推定しています。

一般には、所属する郡が違い、領主が違ってきたために、分離にあたって染屋地区にも佐志能神社を建立したとされているようですが、因縁と云うか因果と云うか、どうも別な説があるようなのです。それによれば、村上佐志能神社が置かれていた場所、つまりは現在の染谷佐志能神社が染谷領にかかってしまったので、本家である村上村のほうで、日本武尊を祭神とする神社を別に創立したもので、それが現在の村上佐志能神社であると

言うのです。石岡市史などもその説を採っているようですが、現在の村上佐志能神社はずっと龍神社と称し、明治十六年に現在の神社名になったということですから、何となく疑問もあるのですが、真相を確かめる史料がありません。どうも龍神山と同じように佐志能神社もまた、戸籍のことで問題を抱えているようで、お気の毒です。

神社の問題を考える場合に忘れてはならないのが寺院との関わりです。明治維新の神仏分離まで、どこの神社も寺院と一緒にした。お寺としての性格のほうが強かったのです。村上佐志能神社も錫杖院（しゃくじょういん）という寺院だったのです。そして、このお寺の本山が何と、染谷に置かれた金剛山宝持院密厳寺（こんごうさんほうじいんみつごんじ）という新義真言宗の寺です。密厳寺の創建は文安四年（一四四四）だそうですから、丁度、染谷が村上から分離した頃になります。大塚氏没落で集落の力関係が逆転したのです。

染谷の佐志能神社には今でも「十二座神楽」が伝わっています。地元のお話では後継者不足で伝統芸能の継承が難しいとか、その十二座神楽は芸能が盛んになった室町時代に染谷地区に伝わったものらしいので、密厳寺の建立に伴って新義真言宗豊山派の大本山である奈良・桜井の長谷寺から導入したのではないかと推察しています。なぜかと言えば旧八郷の真家地区に伝わる「みたまおどり」が長谷寺からのものですし、詳細は分かりませんが長谷寺は別名を「豊山神楽院」と言うのです。なお、長谷寺の所在地は晡時臥山伝説の発祥地に近いところですから何らかの因縁が感じられます。

神様の話のお寺が出てきて申し訳ありません

が、序でもう一つ、気になる話があります。江戸時代の末期に書かれた村上地区の記事に「柿岡道、村上へ向かって左の方、幼（ちご）の墓というあり。見るに大石の岩石ありて、これ、その頂に愛宕の神を祀る。古来より花光院（所在不明）の支配なり。甚だ旧跡と見ゆれども伝の未知と書せり。村上神社とは男龍神か、又は幼の墓か、是非を知らざるなり」とあります。

現在の村上佐志能神社には本殿前に巨大な岩石があり、裏山は見上げる崖で古木生い茂り、正に神代を思わせる雰囲気があつて、上のほうにも鳥居が立てられていたようですから、記事の場所は村上佐志能神社のような気がします。

村上・染谷とも佐志能神社は仏教に支配され、内容を変えながらも連綿と千六、七百年間続いていたことになりました。

現在、村上社は金比羅神社が、染谷社は総社宮が管轄しているようですが、かつては両社の神官は同族だったそうです。両社とも地元の人たちが集まって祭礼を執行されています。染谷社のほうは十二座神楽が残り、また参道が続いていたため、近年まで祭礼が賑わっていたようですし、村上社は集落の中にありながら古代の面影を残しています。男龍と女龍とに分かれるようですが山と同じように、どちらがどうだと言わずこの際に二社一所として存続されることが理想のような気がしてなりません。男龍と女龍は夫婦なのでしょから。合祀される場所は現在の村上社と染谷社との中間点が良いのではなどと、勝手に考えて龍神山を見上げたら、中間点は完全に崩されて在りませんでした。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 URL:<http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

龍神山が無事でいたならば山頂までの道を整備し、絶景のハイキングコースとして観光に一役買えたのではないだろうか。歴史の里が意味のよく分からない「風土記の丘」だけに頼っているようでは、不運な龍神山や佐志能の神々を安堵させることは出来ないでしょう。石岡が繁盛しないのはその所為かも知れませんよ。

◎佐志能神社に関する「石岡市史」の記載事項抜粋（関係部分）

佐志能神社（村上）

鎮座地 石岡市村上字男龍下四九四

祭神 日本武尊 閻籠神

由 緒 村上村にあり 土人龍神と称す 今

（明治惣 新治郡に属し雄龍山の麓にあり「龍神社」と号す

創建年代年月不詳なれども、三代実録

に仁和元年九月七日戊子、授かるに常陸国

従五位下、村上神社従五位上とある。

龍門・君門の二穴あり、甚だ深く底知れず、

これより清水湧出村上の引用水なり、世に

村上に井戸なし社殿しばしば火災あり、明

治十六年四月現社号となる。

昭和二十七年、宗教法人設立

宮司 八城精一

祭礼、四月十九日 古典民芸十二座神楽

の奉納あり

佐志能神社（染谷）

鎮座地 石岡市染谷峠一八五六

祭神 豊城入彦命 高籠神

由 緒 承和四年三月、仁明天皇のとき常陸国

治郡佐志能神社に預る豊城入彦命東国鎮定の大功を立て、子孫東国の国造に任ぜられ

る者が多かった。玄孫荒田別命の子孫、佐白公新治国造に任じられたとき祖神を鎮斎した。（佐志能は佐白の転訛）

高籠神は村上の閻籠神と同胞にして両部で龍神と称し雨の神である。村上村では別に一神社を創立し日本武尊と閻籠神を鎮斎。

文久二年九月に社殿炎上しその後再興した。屏風岩の穴に手を入れると雷鳴があるまで抜けず、（風神の穴）ここより黒雲湧き雷雨を降らすという。

明治二十九年郷社に列格

昭和二十七年宗教法人設立

宮司 石崎 弘

祭礼、四月十九日 古典民芸十二座神楽の奉納あり

この記述は分離の理由として「佐志能神社のあった場所が染谷領だった」とする説に依っています。分離の際に「染谷地区が新たに佐志能神社を建立した」説もあり、どちらかに断定する根拠はないのです。古代に従五位上の官位を得ていたのは、あくまでも「村上の社」だったので、簡単に「染谷の佐志能神社が元からのものだった」と言いきれないように思います。

実に愉快的な気持ちにさせられる。紙上書簡のようながができる様になったのは正しく三年という積み上げの結果であろう。十月に当「風の会」と朗読舞劇団「ことば座」の合同三周年記念をギター文化館のご協力を頂き、行ったのであるが、三年間の積み上げの成果がこのような形で表れてくれたことは愉快の上もない。継続が生んだ愉快が、いつか文化力となる事を望んでやまない。

以前にも書いたが、この会の人達の自分の思いを通してふる里を表現しようとする執念のようなものには頭が下がる。途中退会された人もいるが、残っている人、また新しく参加した人達には、今月は原稿なし、と言うことが一度もない。これは凄いいことであると思う。

よく「忙しくてできない」という言葉を聞くが、どんなに忙しくても、出来ないという事は決していない。忙しくてできないと言うのは、やりたくない、ということに他ならない。忙しくて、という台詞を「やりたくない」の隠れ蓑にして言い訳する奴は、所詮何もできない奴、と私は断言する。

自分自身の経験からしても、忙しくてできないという事は決してない。年間80本を超す脚本を書きなぐり、十数本の短編映画を監督し、それでも何かをやる時間は創れた。80本の原稿と言うと、原稿用紙およそ七千枚ほどになる。ゆっくり眠る時間など到底ない。それでも時間は創れるのだ。

忙中に閑あり、というのが私はその言葉は好きではない。「塵裡に閑を偷む」が正解であると思う。何処かに少しぐらいの閑はある筈だと探しても決して閑は見えてこない。閑は偷まない限り無い。

閑を偷む知恵のない奴は、暮らしの知恵も働かすことはできない。私はそう断言する。

風の会会報の三年を総括してみるに、全員よくぞ閑を偷んだものと思う。今後も閑を偷む知恵を持ち続けたいものと願ってやまない。

風の会の兄妹である劇団「ことば座」も風の会に四カ月遅れの十月に三周年を迎えた。発信基地としたギター文化館での公演は、この十二月で十八回になる。公演活動の第一ステージとして三年間にわたって二カ月に一回の定期公演をこなして

きた。主演女優の小林幸枝をプロの女優として確りと自立させるためには、ハードすぎるのであるが、これをこなせない様ではお話しにならない。

しかし、実際には大変なことではある。音を上げることなく続けてくれた。見事に第一ステージをクリアしてくれた。来年からの第二ステージのどこかで、一つ切っ掛けを掴んでもらったら間違いなく新しい表現女優としてブレイクしてくれるだろうと思う。

ついでに自分のことも少し褒めておこう。三周年記念展及び公演に際して、ギター文化館の木下代表がブログで、「考えてみたら、この三年間で新作を二十三作品書き上げるのは、凄いことだ」と書いて頂いた。そうさ、本当は凄いことなんだぞ、と自分を褒めてみるが、小林幸枝に約束した百の恋物語に届くのはまだまだ先である。漸く四分の一に達したばかりなのである。

兼平さんの石岡歴史案内に端を発して、本紙上における書簡が実現した。こうした嬉しい出来事の起こる中、十一月より毎月第二土曜日の午後七時から、いしおか補聴器の阿部さん、風の会、ことば座が協力し「ふるさと歴史・文化の物語を朗読に聴く夕べ・ふるさと知ろう会」がスタートした。

ふるさと知ろう会の第一弾としてのテーマは、「常陸国分寺」で打田さんが執筆を担当。第一話「仏教の伝来」を朗読した後、打田さんを囲んで雑談会が持たれたのであるが非常に楽しく有意義なものであった。いしおか補聴器さんのお店を借りての知ろう会なので、十二、三人までの小さな集まりではあるが、このような地道な会が長く続いてくれることを願うものである。

当面は、打田さんに原稿執筆を担当して頂くと思っているが、朗読時間と原稿の枚数を把握するのに苦労しておられる。しかし、原稿に書ききれなかったことを、雑談の中に伝える事はそれこそ一方通行にならなくて楽しいことである。参加人数に限りがありますが、色々な方の参加を期待するものである。

継続という点では、今年を振り返っての唯一の汚点、というか情けないことは、自分達の暮らすふる里についてもっと主体的に考え風土に培われた文化の力で人の流れを創造しよう、とギター文化館の協力を得スタートしたふるさと文化市がわずか三回で頓挫したことであろう。

先に書いた「忙しい」を「やりたくない」の隠れ蓑に使った言い訳の典型と断言できるもので、そこに関わりをもった者としてはやはり本年の汚点であったと総括し、断ずる以外ない。しかし、文化人を自称する吾と吾等であるから「敗戦も当に風流なり」は当然、見失ってははいない。

さて、次なる寅の年にはいかなる愉快に風流することができるのであろうか。

## 感謝

兼平ちえこ

この一年間は、昨年に引き続き「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内箇所をもとに、石岡の歴史を、市民のみなさんとの触れ合いを大切にしながらの取材と、石岡市史(上)、いしおか昭和の肖像、石岡の遺跡、石岡の地名等を参考資料として、出来るだけ短文で分かりやすくを目標にご紹介してきました。

私にとりまして、お陰様で石岡の歴史について、今までより以上に知識を深める機会を得ることが出来ました。しかし、紙面上では、私の未熟さから、歴史は難しいとの評も多々ありましたし、暖かい応援と励ましも頂きました。

歴史は語り継がれた部分(仮説も含む)と遺物、遺跡、映像として残っている部分とがありますが、歴史を好んで研究なさっている方々の多方面からの見解の中で、自分なりに納得しての表現になりました。

先月、四十二号の会報の中で、染谷佐志能神社の起こりについて、ご愛読いただいている方より、ご意見を頂きました。その旨を風の会の皆さんにお話ししたところ、歴史エッセイをお書きになっている打田さんから風の会事務局と私に文書で所感が届きました。それで本号に紙上書簡として掲載して頂きました。

編集事務局の白井さんには、風の会会報もやつと紙上書簡を交わせるようになったと愉快のステップアップを喜ばれましたが、私も改めて読者の方々の応援に感謝の言葉を献じたいと存じます。

尚、村上佐志能神社につきましては、先月号の原稿を書く前に、ふるさと風の会の白井さん、打田さん、小林さんと私とで、地元の小松先生にご案内をお願いし伺ってまいりました。一同、神社のたたずまいの荘厳さにすっかり魅了してしまいました。

小松先生のご説明では、以前は村内外の皆さんで大層なにぎわいを見せていたそうで、特に小学生の遠足シーズンには大勢の子供達が登山を楽しんだのだそうです。また涸れることのない御神水は村の飲料水としてその恵を分け与えてもいたの

だそうです。

山の頂上には、水を湛えた硯の形をした石があり、眺めの素晴らしさは格別とのことでした。しかし、急斜面が多く、足元の不安定な方は大変危険ですとのご注意を受けましたが全員好奇心旺盛朗読舞俳優の若い小林さんを除いては、足元の心配な三人の為に、一日も若い時期での登山の実現を約束し、後にしました。

また総社二丁目四番地に鎮座する青屋神社の折には「青屋さんには、大変なご利益を頂いた。是非皆さんにも知って頂きたい」とのお話しも頂いています。このお話は、来年の二月号あたりでご報告出来るかと思えます。

そして、私にとりまして思いもよらなかった出来事が起こりました。

先月十一月十一日に「霞ヶ浦と石岡の歴史」について講話を頂きたいとお声を城南公民館羽鳥館長と担当の鈴木様よりかけて頂きました。石岡市歴史ボランティアでのガイドも先輩のご指導を受けながらの未熟さですから到底無理の返事をしましたところ、普段の案内方法で一人でも多くの市民の皆さんが石岡の歴史に興味を抱ききっかけとして是非にと後押しと励ましを頂きました。

私は平成十三年九月に歴史ボランティアガイド養成講座を受講し、二つほど驚いた事がありました。

まず、石岡には古代からの深い歴史のある事、そしてその歴史を知らない市民の皆さんが多い事でした。その当時、私は「ヘタでいい、ヘタがいい」のキャッチフレーズで人気の、絵と一言添えての絵てがみの交流を楽しんでいました。

手紙は一人対一人の交流ですが、一人対不特定

多数の交流では是非市民の皆さんに、絵と一言添えての石岡の歴史を伝えたいという思いを抱いていましたので、何点か描いた中の「歴史の里いしおか、ウォーキングご案内」をもとに講話と言うようご案内をいたしました。受講の皆さんには稚拙なご案内でお気の毒でした。でも二十人余りの皆さんにお伝え出来たことで、私の夢は実りました。

羽鳥公民館長、担当の鈴木様のご寛大なお取り計らいで、私にとりまして貴重な体験をさせて頂き、幾重にも感謝申し上げます。有難うございました。

とかく「歴史には興味がない」という方を見かけますが、耳を傾け、健康増進を兼ねたウォーキングなどで郷土を知り、誇りを持つて頂くことは人生を豊かにする事と、お薦めいたします。また小学生、中学生、学舎の地に選んだ高校生の皆さんには是非石岡の歴史を知り、郷土愛を育んで欲しいと思っております。

講座の後、十一月十五日に、安孫子の野鳥の会の皆さん二十六人への案内人の一人として加わりました。その折、「石岡は、明治・大正・昭和になりますと、商業、醸造、製糸などの産業都市へと成長していきました」との説明後に「現在は何んな産業が？」との質問が飛びかいました。「豊かな自然の中で果物を中心に？」その他の言葉はわかりませんでした。そしてもう一つのご質問は、こんなに歴史があるのですから、遺物など一同に見せる会館はあるんですか？と。この事は、ガイドをしていて、尋ねていらつしやる皆さんほとんどからお聞きすることでした。このご時勢にとまづりでの人形等一同にお見せ出来る会館は、次

## 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...  
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けて  
もらい自分の風の声をふるさとの風景に唄  
ってみませんか。  
オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、  
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
0299-55-4411

代に語り伝える為にも、現在の市民の皆さんの英知の結集で果たさなければならぬ産業ではないでしょうかと強く感じるこの頃でございます。一年間のご愛読と応援、誠にありがとうございます。お元気でご越年下さいませよう。

・ウラジロのある 林道を行く  
・師走を染める山茶花 急ぐジングルベル  
ちえこ

最近では歴史ブームなのかな、と思われるほど気がつくテレビで歴史ものや戦国ものの番組が流れている。自分が気になっているものだからそうした番組が印象に残っているのかもしれないけれど。

両親は、石岡に五十年以上も暮らしているのに、石岡の歴史のことはあまり興味もなく殆ど知りませんでした。でも私がことば座でふる里の風景や歴史をモチーフにした物語を朗読舞劇に表現しはじめてから、私がいろいろ話をする事もあります。が、興味を持ち始め、最近では三人で良くふる里の史跡や美しい風景、寺などをたずねて巡ります。

旧八郷の盆地を作っている愛宕山、難台山、吾国山、加波山、足尾山、筑波山には美しい滝も沢山あります。石岡市だけでも赤滝、堂平の不動滝、月見の滝、媛ヶ滝、鳴滝、馬滝、こえつばの滝、小山田の行者滝、上曾の滝、萱場下の滝があります。名も付けられていない滝などを数えたらそれこそ大変な数になるだろうと思います。

滝巡りをしていると、必ずお寺や神社に出会います。特に印象的だったのは、馬滝に行く途中にある明圓寺に登る小道です。青い苔がびっしりと生えていて幻想的な小道の姿は、どんな名刺にも負けない景色だろうと思います。もう紅葉は終わってしまったと思いますが、紅葉の隙間から流れる陽ざしをうけた苔道はさぞかし美しい事だろうと思います。

十月の末に、白井先生、兼平さんご夫妻、打田さんと私の父とで、十二月公演の舞台となる愛宕山の十三天狗を祀る祠をたずねた後、村上佐志能

神社に行ってきました。村上佐志能神社は暗くて薄汚い感じに思っていました。実際に行ってみて全く違う事に驚きました。

龍神山はもともとは村上山と言っていたそう。染谷の佐志能神社よりも格式が高かったのだそうです。

朗読舞のことは座は、来年から第二ステージとなり、ギター文化館での公演は六月と十一月の二回になります。第二ステージの第一回は、この村上佐志能神社をモチーフにして、常世の国の恋物語とすることが決まりました。どんな話になるのか、どんな舞いを創造するのか今から楽しみです。

でも、十二月二十日は第一ステージの締めくくりの舞台です。第二ステージの事よりも先ずはこの十二月の舞台を確り演じなければなりません。愛宕山の十三番目の天狗になる筈だった山伏と村娘の恋物語。御来場お待ちしております。

## ツングースカの大火球

菅原茂美

地球の上空は、いま非常に賑やかだ。人工衛星やその破片などが数えきれないほど多く、猛烈な勢いで地球周辺を回っている。いずれ、その推力を失えば、落下途中で燃え尽きるか、燃えカスが地上にまで落ちてくるので、危険極まりない。

なぜそんなにも危険なものが、無数に飛び交っているのか？ 人工衛星によって我々は、携帯電話・カーナビ・天気予報など、多くの恩恵を受けている。しかし、軍事衛星や衛星破壊兵器など、

得体の知れない軍事機密の危険物が、宇宙空間を我が物顔で横行されるのはマッピラだ。

人工的なものではなくとも、宇宙からは、ひっきりなしに、何が地球の引力に吸い込まれ、しばしば訪れている。流れ星ならロマンもあるが、隕石・彗星・小惑星など、その規模によっては、莫大な被害をもたらす。場合によっては、人類滅亡どころか、地球そのものが、砕け散り、宙をさまよう、ただの星屑ともなりかねない。

月面には、無数のクレーターがはっきり見える。水や空気の殆どない月では、小天体などが落下すれば、クレーターとして残り、風化することなく、何億年も前からものが、はつきり原形をとどめる。あれほど無数のクレーターが存在するという事は、月がこれまでに無数の爆撃を受けたという事だ。

さてそれでは、その爆撃弾の発射元はどこなのか？ 小天体の生まれ故郷はどこなのか？ それは火星と木星の中間に、太陽系形成時以来、一つの惑星に相当する質量の物質が存在している。しかし、先に誕生した原始木星の引力の影響により、それらの小天体は、惑星にまで成長できず、帯状に連なった「小惑星の帯（メイン・ベルト）」として公転軌道を回り、生き残ることになる。そのメインベルトには、およそ、20万個もの小天体が存在し、最大の小惑星は、直径952kmの「ケレス（セレスともいう。4、6年で公転。6、8等星）」である。このメインベルトの小天体が、地球攻撃の主な発射基地となっている。それらが、色々な引力バランスの影響で、弾き飛ばされ、月や地球にやってくる。

137億年前のビッグバン以降、全宇宙には現



在、約1000億個の銀河が存在する。それらの銀河には、現在の物理学で理解できる物質は、4%のみで、あとの96%はブラックマター（暗黒物質）といわれ、皆目見当のつかない物質で覆われているのだという。そして各銀河は猛烈な勢いで吹き飛ばされ、そのエネルギーは、これまた、現在の物理学では理解できない暗黒のエネルギーなのだという。そのエネルギーにより、銀河同士は互いに遠ざかり、或いは逆に近づいて合併したりする。事実我々の「天の川銀河」は、最も近い（230万光年）お隣のアンドロメダ銀河（恒星の数4000億個の渦巻銀河）と、そのうち衝突合併するのだという。

我々の太陽は、年齢50億歳であるが、核融合反応の燃料である水素は、あと50億年もたず、太陽は爆死してその寿命を閉じる。当然、系内の地球など各惑星は、跡形もなく消え去る。しかしその前に、アンドロメダ銀河に飲み込まれるのだという。

さて我々の天の川銀河は、直径10万光年の渦巻銀河であるが、恒星の数は1000億個である。我々の太陽は、銀河の数本の腕の一本の端の方に位置し、銀河の中心から3万光年のあたりに存在する。渦巻銀河は回転しているので、太陽は2億年かけて元の位置に戻る。

現在の太陽系形成については、今の太陽があったあたりで、先代の太陽が、超新星爆発を起こし爆死した。その跡にはガスと塵の星雲が散らばる。しばらくすると、その中心部分に星雲が凝集し、中心核ができる。それが50億年前誕生した原始太陽だ。星雲の比較的重い物質は太陽の近辺で凝集し、衝突を繰り返して成長し、水星・金星・地

球・火星となつて、これらは、密度の高い惑星として誕生する。木星以遠の惑星は主にガス惑星で、密度は低い。

さて地球は今から46億年前、太陽系の内側から3番目の惑星として誕生した。地球が誕生してわずか1億年後、火星規模の惑星が、地球に斜めに衝突してきた（月起源のジャイアント・インパクト説・1975年発表）。そのため地球は大量の物質を奪われた。衝突してきた天体は、地球軌道上をその破片とともに周回することになる。それらの物質はさらに衝突を繰り返し、みるみる成長を遂げたが、地球の引力圏を脱出することはできず、さりとて地球に再び吸収落下するわけでもなく、地球のまわりを、グルグルまわる「衛星」即ち「月」となった。地球に対し原始の月の軌道は現在より、はるかに近く、地球の自転も、1日、15時間ぐらいであった。

【月のデータ】：月の半径は1738km（地球は6378km）。以下、月は地球に対し体積は50分の1で、質量は81分の1。密度は5分の3、重力は6分の1。水・空気は殆どなく、天候もない。表面温度は真昼127℃、夜明け前マイナス173℃。実に日夜で300℃の温度差があり、生命は存在しないと思われる。地球から平均384,400kmの楕円軌道で公転。時速3700km。

地球1周27日7時間43分。これが人間の月経周期や、海の動物の産卵など、生理現象に直接影響を与えている。そして、月の満ち欠けが同じ位相に戻る（1公転、即ち1太陰月）のは29日12時間44分。満月などかなり明るいように見えるが、入射した太陽光の7%を反射するのみ。石炭粉にほぼ同じ。】

さて宇宙からは、このように、月になるほどの巨大な「塊」が降ってくる。隕石や彗星なども、何らかの引力バランスを崩し、地球の引力に捕捉され、猛烈な勢いで衝突してくる。地球の海に36億年前、生命が誕生する以前には、特に規模の大きい天体が何度も降ってきた。しかし生命誕生後は、月クラスの巨大天体は落ちてくることはなく、もし、このような大規模な事件が発生すれば、地球上の生命は、風前の灯火どころか、絶滅していたに違いない。

さて、前置きが長すぎたが、事実、地球上に起きた過去の天体衝突事件を遡ってみたい。

1908年6月30日・午前7時14分、シベリア・ツングースカの5〜10km上空で、巨大な火球の大爆発があった。70km四方の樹木がなぎ倒され、爆心地から65km離れた地点で、人々は5mも吹き飛ばされた。その明るさは、真夜中のロンドンで、灯火なしに外で新聞が読めたという。爆発のエネルギーは、15メガトンで、広島型原爆1000個に相当するという。

ならば、火球の本体は、一体なんであったのか？それは、彗星か小惑星と考えられる。各地観測所で地震波・空震波が記録されたが、ロシア革命の混乱期でもあり、また1918年のスペイン風邪では、全世界で4000万人も死亡するなど事件続きで、精査されず、破片などいまだに発見されていない。しかし100年を経た今日、やっとイタリアの調査隊が爆心地から10km離れた所に、クレーターとみられる湖を発見し、湖底などを調査し、これから破片探しをするという。爆発は小天体が空気摩擦により空中爆発を起こし、燃えきらなかった一部が地上に突き刺さり、クレーター

を形成するが、長い年月を経れば空気や水の浸食で、原形を止めなくなる。

【しかし、6500万年前、中米ユカタン半島に直径10kmの小惑星が衝突し、恐竜が滅亡した事例では、クレーターは直径は200kmであることが、人工衛星からの観測・分析で解明されている。】

また、ツングースカ規模の小天体衝突は、平均、200〜1000年に1度の割合で起こり得るといわれる。こんなことが何度も起きてはかなわんが、確率から言ったら必ずまた起きる。事実2009年3月2日、直径35mの小天体が、地球からわずか72、200kmの超至近距離を掠めて行った。

過去にも地球に接近し、彗星として明確に軌道が分かっている場合、たとえ進路が狂い、衝突しそうになっても、防衛策として、事前にロケットを飛ばし、接近前に爆破するなど検討されている。或いは爆破が困難な場合、巨大なロケットを飛ばし、その天体に着陸させ、エンジンを吹かして、事前に軌道を曲げて衝突を避けるとか、SF並みの防護策は考えられるが、今年3月に接近した事例は、発見から最接近まで、わずか2日しかなかったといわれる。これでは、どんなに科学が進んでも、衝突を回避する時間が足りない。地球から遠ければ遠いほど少ないエネルギーで、物体の進路を変えることができる。しかし、突然現れる招かれざる客は、手の打ちようがない。ただただ小規模であるか、比較的被害の少ない海か砂漠への落下を願うのみである。しかし、地球近傍の小天体は、現在明確に分かっているだけで、6043個も存在するという。

これらの小天体が、何か、ご機嫌を損ねて、今時、この地球に襲いかかってきたら一体どうなる？

どんな素晴らしい「恋」も、固く結ばれた家族愛も、新政権も、隣国同士のいがみ合いも、そして人類が営々築いてきた文明も、一瞬にしてみんないや、パーとなる。花開きつつある、どんな才能も、完成間近かのスイートホームも、どんな美女も、どんな醜男も宇宙のモクスと化し、ただの原子・分子として散っていく……。『真善美』も、その逆も、ゴチャ混ぜで、すべて雲散霧消。

しかし、こうして宇宙空間に散ったそれらの物質は、いつの日か、再び寄り集まって小さな塊となり、塊同士が衝突を繰り返して、雪だるま式に体積を増し、また惑星などに成長していく。そしてその惑星に、いつの日かまた新たな生命が誕生し、運が良ければ知的生物にまで進化し、恋をするやら、ケンカをするやら……。正に輪廻転生。単細胞の私の脳味噌は、止まるところを知らず、妄想を繰り返す。

ところで、もし、明日にも、恐竜が滅亡した規模の小惑星などがこの地球に襲いかかってきて、地球粉砕が確定的、絶体絶命。末法思想も極限状態。いよいよ「終末の日」が明日と決定したら、あなたは今日、なにをしますか？

私なら多分、真っ先に思い浮かぶのは、高根の花と諦めていた人に、私の思いのすべてをぶつけていきたい。旦那がいがいが、どんな護衛に守られていようが、明日で、この世は終わるのだ。断末魔の情炎を燃やす。ただ突撃あるのみ……。

いや、たとえ架空の話でも臆病な私には、そんなことはできない。何事があるうとも、相手の家

庭に波風を立ててはならぬ。自分にも家庭はある。目に入れても痛くない、かわいい孫達がいる。ただただ悪夢を呪い、神に瞬時の加護を祈るだけかもしれない。しかし、心の奥では『意気地なし』『蛮勇を奮い起せ！』『いや、人間はその最後の態度で真価が問われる』『そんなものクソくらえ！』葛藤を繰り返すに違いない。優柔不断・ぐずら・能天気・いつもの自分と、なんら変わることはないのかも……。

何十年も胸に秘めた例えばあの人。ローマの休日のおドリー・ヘップバーン。時空を超え、孫悟空様に勅斗雲（きんとうん）を借りて、また透明人間にでも化けて、今すぐ飛んで行き、胸の内を打ち明けたい。あの気高さは、いったいなんだ？ それでいてあの超かわいらしさは一体何だ？ 気品とチャメツケが同居の妖精。歌麿もダ・ヴィンチも到底あの美しさを、描けはしないだろう。彼女に比べたら、小野の小町も、楊貴妃も、クレオパトラも、みんなそこらに転がっているカボチャだ。オードリー・ヘップバーン一神教。彼女は私の青春そのものだった。

そして私に言わせれば、そもそも世にいう超美人というものは、決して一人の男が妻とか何とか言って、独占してよいものではない。超美人は「人類共有の財産」である。みんなが、その恩恵にあずかれる権利がある。超美人は、全ての男にその「やわ肌」を公開すべきである。独占禁止法という法律は、当然ここでも適用されるべきだ。独占した男は、法により、罰として、しばらく刑務所にでも入っておれ！ サユリストや、ヨン様追っかけ集団どころじゃない、一神教に狂うストーカーほど怖いものはありませんぞ！ かつての特攻

隊や人間魚雷、そして近年の爆弾を身にまとった自爆テロに、一步も引けはとりませんぞ！ いささか、饒舌が過ぎたか？

人知の及ばぬ、天のみが知る宇宙の原則により、この地球などというちっぽけな星に、大小様々の近隣の星屑が、添い寝をしたいのか、遠くからやってくる。それを拒むことはできず、相手の思うが儘に従う他ないのがこれまた天の定め。宇宙の法則まで捻じ曲げようなどとするのは、傲慢というもの。人類は高々700万年の進化で、宇宙まで己の思うが儘に支配しようとするなどは、天を恐れぬ不屈き者ということになる。

ならば自然現象の大事件も、甘受するほかあるまい。大事なことは、調子に乗って、己の才を超えた、デシヤバリをしないこと。即ちオゾンホールを拡大させたり、温室効果ガスを大量吐き出し、取り返しのつかない環境破壊を起したりしないこと。核兵器など危険なオモチャは、即刻廃棄することe t c.

全宇宙には、この地球などより遥かに文明の進んだ知的生物がいるに違いない。しかし彼等は決してこの地球侵略などにはやって来ない。それは真の文明とは、地球人が今までやってきたような、侵略を繰り返して強大国に発展するなどは、ゲスのやる事。品格ある高等生物のやることではないことを宇宙人はすでに悟りきっているからである。偉大なる、高潔な宇宙人は、こんな地球侵略などは、決してやりつこない。地球人も、少しはそれを見習い、品格を重んじては、いかがでしょうか。

暗い話ばかりの中にチョットだけ明るい話がる。2009年9月9日、旭ガラス財団は、世界93

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6  
☎0299-24-3881

## 歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

いしおか補聴器では、11月からふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

12月12日の第2回朗読会は、第1回に引き続き、打田昇三作「国分寺余話・第二章：王朝と仏教」です。

定員10～12名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読会料金(1,000円・・・コーヒーorお茶、お菓子付き)朗読終了後、ふるさと作家打田昇三さん：脚本演出家白井啓治さんを囲んでのお話し会があります。

ふるさとは次の世代に残さねばならない文化と希望の玉手箱

か国の識者757人からの意識調査の結果として、人類滅亡の時刻を、12時とした場合、現在、時計の針は、9時22分であると発表した。これは前年より11分改善(人類の寿命が3000年延びた計算)されたが、その理由は米国がブッシュ政権からオバマ政権に移り、地球温暖化抑制政策に積極姿勢を示したからだという。この計算から見ると9時22分は、現生人類が誕生してから16万年経過しているもので、人類の種としての寿命は20万年ということになる。ということは我々人類に残された時間は、あと4万年ということになる。一方、愚かにも人類は、このまま環境破壊

を続ければ、残された時間は後1万年持たないだろうと未来学者達は言っている。4万年なのか1万年なのかは、これから後の我々の生活態度にかかっている。人類に、もし智慧というものがあるのならば、このような大量消費生活に終止符を打ち、人類の輝かしい未来のために、経済至上主義などという低次元の夢は即捨てて。環境汚染要因を排除し、スローライフに進路を変えなければ、より滅亡の日を早め、はかなく消え去っていく運命となる事を、全人類は強く認識しなければならない。私はそう考える。

Tさんからわたしたちが畑をお借りして、その場所の風習から言葉から何から何まで教えていただいている。その地域の方言を英語を覚えるように、Tさんのあとに続いて何回か繰り返すと、玉がはじけたように大笑いする。大笑いしているTさんの声を聞いて私はそれだけでうれしくなる。とにかく元気をもたらすのだ。畑と一緒に草をとったりすることも多い。畑をしながらというんな話ができる。いつも思うのはTさんの言葉の重さだ。実体験に基づいて話しているので本当にひとつひとつの言葉が重い。特に人生について話るとき、どしんと音がするくらい重い。「有里さん、人生に負けたらだめだよ。」そんな言葉がすらりと口から出てくるのは本当に苦労して自分の人生を切り開いてきたからこそだと思ふ。

Tさんの話を聞いてみると、一昔前の暮らしが見える。都会の暮らしと違って制約の多い生活。家制度のなかで果たす嫁の役割、女性がどうやってこの農村で生きてきたかをみる事ができる。苦労しているのはTさんだけではない、この30年だってもっと前だって、女性は家を背負って重い足取りで一歩歩き、休んではまた一歩歩きて、生きてきたのだった。でも大笑いしながらの苦労話を聞いていると、以前にきいたことのある「自由について」の話を思い出す。昔の人はたとえれば農民は一生農民で、武士に生まれれば一生武士というように生き方が決められていたが、その制約の多いなかでいかに自由を得るということができていたか、というような話をきいたことがある。今は自由に生きてよいということでも自分で

で選択しなければならぬ。制約がないからこそののか、恵まれすぎているのか、逆に心は不自由なのかもしれない。本当に自由になるための翼は自分の心の中にだけあるのかもしれない。環境のせいや周りのせいにすることなく、本当の意味で自由を手に入れるために、私には長い修行が必要だ。Tさんのように「わたしはやりきった。」と胸を張って言えるように、日々を悔いなく過ごしたい。それにしても八郷の老人たちはスーパーマンだ。新しい畑で出会い始めた老人たち（とても老人とはいえない）は80歳を超えても毎日畑にたち、完全に自給自足の暮らしをしている。話を聞けば聞くほど「すごい！」と思う。80歳以上で入院しても、必ず復活して、元の生活に戻っていく。最後の1日まで生き切ろうという執念はいったいどこから来るのだろうか。何も考えずにそのように生きていっているとしたら、一体それはどんな気持ちなんだろうか？ 農閑期にせひじっくりお話を聞いてみたいなあと思ふ。

### うし塚 うま塚

伊東弓子

この頃は過ぎた日と思う事が多くなった。そしてその時々私に向い合う楽しさを味わっている。隣の村境にある「うし塚」の事もその一つだ。頭の片隅にあつて、何時か確かめようという思いだけを引き摺りながら何十年も経ってしまった。

伝説調べの時間聞いた名で、人家の裏にこんもりした木立があった。家並みの前は古い通りで私が好んで通っていたのも、うし塚への思いからかと考えるこの頃だ。

今月に入って「うし塚」の木立がなくなっているのに気がついた。塚があるのかどうか人家に隠れて全く見えない。そうなる気になる。気になりだしたら確かめてみたくなった。私の青春時代の一つの思い出が消されてしまった様で切なかった。それで、置きっぱなしにしておいた青春をも一度という思いで尋ねる事にした。

遠回りし塚の所まで行った。塚は丸裸になっていた。木が茂っていたとみたのは大分前の事になるのか。切られた株を見ると大半は竹の切り株だった。塚は笹の葉に覆われていた。高さ二メートル位で周囲五メートル位の大きさだ。人家と泥の水溜りの間に合った。これではやがて傾き崩れてしまいそうな場所にあった。

近くの畑で白菜の虫捕りをしていた二人の老婆に聞くと、  
「うし塚なんて知んねえな。嫁に來た者だからこの地の事はわかんねえよ」という。

「その溝水は昔の山王川だよ。今は汚つたない水溜りだけんど」

と教えてくれた。この塚の傍をくねくねと曲つた山王川は隣町との境をつくり、この地の歴史を見てきた事だろう。この塚どんな風に、何の為に造られたのだろうか。うし塚とあるから牛が葬られたのだろうか。未知への夢が広がっていった。

それから時間を作って歩いてみた。地元で生まれ育った六十代の男の四人に聞いたが、うし塚という名を知っていたのは一人だけで、その場所は分からないという。今は亡き七十代のご主人から聞いたという奥さんと妹さんからは少しながら聞いた。

うし塚は田中の人の土地で、周囲の人の要望で先月あたり、持ち主さんが竹、木を伐ったという事だけで、塚にまつわる詳しい話は分からなかったが、「うま塚」というのもあったと、教えてくれた。

高浜の台の方にある筈だが、畑に削られたかもしれない。木が茂って隠されてしまったかな。場所もはつきり知らない様子だった。八十代のお爺さんが教えてくれた事によると、うし塚は例の所だがうま塚は台の共同墓地の先の方だという。畑の中にあつたがもう崩れてしまったかも知れないとの事。その足で行って見たが一向に分からなかった。お爺さんの話しの中で二つの塚の話がよく具体的になった。

田中の河口という侍と愛馬の話だった。毛並みの良い馬だった。戦いにも主人をよく助け功をたてたという。ここは東側から北側に台を背負う地が続ぎ、その山間には清らかな水が流れ出ていた。侍はその流れの浅瀬で馬の汚れを流し、一日の労を労うのが常だった。ある夕暮れ時いつもの様に体を洗ってやっていたが、いつになく落ち着かない馬の様子に主人は手をやいていた。尾を振り足を必要以上に動かし、首を振る。水飛沫が主人の衣に顔に係る。諫める声もだんだん荒げてくる。とうとう馬は主人の手を振り切って走り出した。何事か、驚きもさる事ながら良い馬を失う事への不安も入り乱れ、後を追った。馬を追うのは容易ではなかった。やっと見つけた所には一頭の牛と戯れている姿があった。首を摺りつけ、体を寄せ合い、甘える様な声で語り合っていた。やがて二頭の間に生まれたのは牛だったという。姿は牛でも体つきは馬のように格好よく足は早く主人

を助け戦功をたてたという。その牛を弔ったのが「うし塚」だという。では「うま塚」というのは父親になる馬の甲らわれた塚かな。じゃあ母親となった牛はどうしたのか。うま塚は台地の方になりうし塚は水辺の近くにあるのか。理屈ではなく伝説なのだからと思いなおした。馬は若者で牛は娘だったのでは、等考えてみた。伝説調べをしていた頃、聞き書きしておけばもっと具体的な事が分かったらうにと残念に思う。

高浜、田中には古城跡もある。常に戦いの舞台であり、強い武士や立派な馬を必要としたらう。村人達の踏みじられた生活があつたらう。そんな中にも男女の物語も沢山あつたらう。消えかけているこの話しの影に何かが見えてくる様な気がしてそれを見つけてみたい。私と共通するものがあるようで、一寸覗いてみたくなった。もう少し歩いてみよう。

## ふるさと風の文庫

### 新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の  
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)(1000円)  
菅原茂美第二作「遙かなる旅路」(2) (定価:500円)  
伊東弓子作「風のかげ」 (定価:400円)

打田昇三:ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・ )  
(二冊組:1000円)  
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価:500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと  
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

### 日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ「風邪に押されて」 (定価500円)  
小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)  
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組:800円)  
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館:0299-46-2457  
・いしおか補聴器:0299-24-3881  
にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡13979-2(白井方)  
電話0299-24-2063

常陸国風土記に登場し黎明時代の県央を征服したであろう「建借間命(たけかしまのみこと)」の墳墓とされる愛宕山古墳は那珂川右岸の水戸市愛宕町にある。そこから常磐高速道下を過ぎた上流1km程の地域は水戸市飯富町で、石岡市の龍神山と同じ蛇神伝説を持つ「朝房山」が南西に近い。常陸国成立の謎を秘めた地名だと思われる。

「飯富(いいとみ)」は姓にも使われていて昔は「飫富(おお・おぶ)」と呼ばれていた。古事記を編纂した太安万呂(おおのやすまろ)は此の一族であるとされる。神武天皇神話に登場する神八井耳命(かむやいみのみこと)の直系子孫なのである。この神様は玉里に現存し、石岡にも在った「耳守神社」の祭神にされているけれども、本来は耳鼻科専門の神様では無く、神話上の第二代天皇になるべき大和朝廷の本流であり、鹿嶋神宮祭神(武甕槌命)にも関りのある神様である。

常陸国は始めに飫富(多、太、大)氏が開発し次いで物部氏や出雲系の武将が来たと考えられているから飯富町は草創期の地名になる。なお姓名学では「飫富」姓について「飫」が面倒なので「飯」を当て飯富(おぶ)と呼んでいるうちに訓読みで「いいとみ」に変わったとしている。

地名もそうだが、姓名もこういう変化が数多くあり、加えて明治維新では徳川幕府が付けさせたかった庶民の名字を法律で付けさせるようになつたから、日本人の姓は收拾がつかないほど多くなつて「世界の七不思議」などと言われている。例えば「一尺二寸(かまのえ)」「八十八騎(とどろき)」や「小鳥遊(たかなし)」などは答えを聞いて納得

できるが「一口(いもあらい)」「日田(たちごろ)」「庁(こばなわ)」「井石(どんぶり)」「久里(さか)」などに至っては想像もつかない。或いは石岡で鈴木健先生が独自の研究を続けておられる「縄文語」にも関係があるのだろうか…無条件降伏

その反面、同じ姓名が多く、地名も同一の自治体が各地に存在した。さすがに「市」では東京と広島のみならず、田村、大宮、池田、大野、小川、五日市、千代田、山田、大和、東村などが多かった。平成の大合併では根底から引っくり返るような新しい名称の自治体が増えた。これで同名の町村も減つたのであるが、合併して名前が一つとなるとどうしても無理が目立ち何よりも歴史が消えるのが淋しい。

お節介のようだが、名称を変更した意図が分からない都市が異国にも在るもので、ギリシア東北部のエーゲ海沿いで、昔はトラキアと呼ばれ野蛮国扱いをされていた地方に「アレクサンドロポリ(アレキサンダーの町)」と言う人口二万弱の港町がある。トルコとの国境までは十五kmほどの場所である。此の町は二十世紀の始めまでロシア人に支配されており、その時代は「デデ・アガシュ」と呼ばれていたのだそうである。一九一九年に、多分、ロシア革命の影響でバルカン半島が混乱したから、その時にギリシア系住民が押さえたらしく現在の市名に変えたのだそうである。

ロシア人から取り返してギリシア系の名称にしたのだから良いではないか…と言われそうだが、トラキアはマケドニアが最初に侵入支配した地域である。実はアレキサンダー大王の帝国時代には征服された国々で「アレキサンドリア」と名乗ら

された都市が七〇個所もあった。帝国滅亡後に急激に減つて、現存するのはエジプトの地中海沿岸にあるアレキサンドリア市ぐらいである。そういう流れの中で、アレキサンダー征服の被害者トラキアの大都市デデ・アガシュが、忘れた頃に都市名をアレクサンドロポリ(アレキサンダーの町)にしたのは注目に値(あた)いするのである。

七の章で紹介した古代ギリシア密教の聖地サモトラケ島は、そのアレクサンドロポリ港から南へ約四十kmのエーゲ海に在る。アレキサンダーの父フィリポス二世(マケドニア国王)と母オリンピアス(エピロス国王女)は、その宗教団体信者同士で結ばれた。北風が吹きまくる島に本部を置く宗教団体は思い込みが激しく信者も似ている。

過激な夫婦の間に生まれたアレキサンダーは有名な哲学者アリストテレスを始めとする家庭教師から高度の学問を教えられ、狂信的な母親から「神の子」として特別に扱われ、戦争好きな父から武力による征服を荒々しく教えられて育つた。

紀元前三三八年、当時のギリシア社会を代表する都市国家テーベ市とアテネ市が、その他大勢の国々と歩調を揃えて新興勢力のマケドニア王国と戦つた。ギリシア本土中部のカイロネアが戦場である。かつてはギリシアの覇者であったアテネ市は、この一戦に国家の命運を賭けた。北方の沿岸地帯に在った殖民地をフィリポス二世に次々と奪われ、無念の涙を飲みながら背水の陣で臨んだ戦争である。テーベ市にしても、混乱していたマケドニア王国から人質の形で保護していたフィリポスに恩を仇で返されるのが今回の戦争であり、絶対に負ける訳にはいかない。

連合軍とマケドニア軍はカイロネア山峡の小

さな川を挟んで対峙した。フィリポス王は自ら右翼の部隊を率い、息子のアレキサンダーには騎兵隊を率いて左翼に布陣させた。戦闘が始まるとフィリポスの軍は後退を始めた。これに幻惑されたアテネ軍は何の思慮も無く、川の浅瀬を越えてフィリポスの軍を追った。それを見てアレキサンダーの騎兵軍団二千が左翼から川を渡り急旋回で連合軍の右翼を急襲した。同時にマケドニアの中央軍が連合軍の中央部を突き、フィリポス軍団は後退を止めてアテネ軍に襲いかかった。分断された連合軍と包囲したマケドニア軍では戦力の度合が違ってくる。連合軍は負けた。騎兵部隊は壊滅的な損害を受け、歩兵部隊は退却したのである。

程なくフィリポスの名代として十八歳のアレキサンダーがオリブの枝を持ちアテネ市へやってきた。平和条約の交渉であるがアテネ市は拒否できる立場に無かった。平和交渉とは言っても実質的な戦争責任の追及である。マケドニアを恨み続けたアテネ市は案に相違して寛大に扱われたが、少年時代にフィリポスを預かっていたテーベ市は予想外に厳しい処分を受けたという。

この扱いの差についてきの章で触れた伝記は「…かつてのペルシア戦争に全く参加することがなかった(ペルシアに屈した)テーベ市と、四度もペルシアと戦ったアテネ市との区別…」としている。ギリシア社会の覇者となった異国マケドニア王国のフィリポス二世が、百数十年前にペルシア帝国が攻めて来た際の対応を評定しているのである。そのフィリポスは当時のギリシア世界に全く関わりも無く生まれてもいない。それどころか、当時のマケドニアこそ、早々とペルシアに服従してギリシア侵攻のお手伝いをしていた国である。

フィリポス二世の、この歪んだ正義感、そのまま息子のアレクサンドル二世に叩き込まれた。やがて父の意志を継ぐ形でアレクサンドル二世とアレキサンダー大王がペルシア帝国を攻めると言うのが一般に知られている筋書きである。

カイロネイアの戦いの翌年、紀元前三三七年に講和条約の延長でギリシア諸国の代表がアテネの北西方向にあるコリントス市を会場として集まり同盟を結んだ。かつて大国ペルシアの侵攻が予測されたとき、スパルタ、アテネを中心にギリシアが一致団結して敵を防ぐ決意を固めた場所がコリントスなのである。しかし、今回の会場には落ちぶれたスパルタ市の姿が無く、**ギリシアの盟主**に選ばれたのはフィリポス二世であった。

この会議では、ギリシア社会の次なる目標として「報復のためのペルシア遠征」が採択された。莫大な金がかかることだから、何処の国も両手を挙げて賛成では無いのだが、マケドニアが言い出したことに反論は出来ない。一方で当時の世界帝国は依然としてペルシアであり、現在のトルコがペルシア帝国の支配下にある以上は現地に数多く残るギリシア系植民地の根本的不安が無い訳ではない。そしてもう一つ、人口増加に対応して資源の乏しいギリシア人が稼げる仕事は「傭兵」であり戦争が無いと失業者が増えて困るのである。

矛盾を抱えながら、戦争好きなフィリポスを盟主に選んでしまったギリシア同盟の諸国は落ち着かない日々を過ごしているうちに、遠征計画は沙汰止みになり「フィリポス二世が病氣らしい…」という噂がギリシア人社会に流れはじめた。

「…四十にして惑わず…」と言つ諺があるが、四十五歳になったフィリポスは大きな迷い道に入

り込んでいた。若い頃から戦争に明け暮れて肉体的、精神的にも疲労するのは当然だがギリシア社会の頂点に立った時は、過去の戦闘で片目を失い片脚は不自由だったと伝えられている。そして期待した息子は自分の才能を受け継ぐ立派な武将として日々成長している。息子への嫉妬と羨望が自分への後悔と失望になって、フィリポス二世は国王の責任と義務をあつさり放棄した。敵に向けるべき「闘争心」を女性への「執着心」に切り換えて国政を顧みず後宮に籠る日々が続いた。

幸いにも(と言って良いのかどうか)妖しい聖地サモトラケ島の熱烈な恋で結ばれた王妃のオリンピアスは、自分が生んだ子は**神の子**であると信じて疑わず、その教育に熱中して久しくペラの王宮に別居していた。アレキサンダーのほうも幼い頃から母親に言われ続けているから、自分でモ、或いは神の子?」と言う思いが生じ、戦争に参加して勝利すると「やはり!」の自信が湧いてくる。

それに加えてフィリポス二世がギリシア社会の盟主に登りつめたとき、異国出身の王妃が王自身の心中で問題になってきた。ギリシアは世界でも古い国だと思われているが、国家として独立したのは一八三二年である。然も最初のギリシア王となったのは、どういう都合かドイツ中部にあった小王国の王子なのである。そのように多民族に支配されながらもきの章で触れた理念に基づきギリシア系民族は一定の枠組みの中で「ギリシア人」の範囲を頑なに守っていたから、軍事力でギリシア社会の盟主に押し上げててもマケドニア人のフィリポス二世は完全なギリシア人にはなれない。

開き直ったフィリポスはマケドニア人の地位をギリシア人の上位に据えることで支配権を裏付け

る根拠にした。そうなるとう王妃がマケドニアより格下のエピロス人であることは都合が悪い。勝手に離婚届を作成したフィリポスは同時に「エウリュディケ」と言う呼びにくい名前の女性との結婚届けを市役所に提出してしまった。この女性はフィリポスが信頼する武將の姪で純粹のマケドニア娘である。この女性とフィリポス二世との間に男子が生まれれば、マケドニア優位の法則からしてその子がフィリポス二世の跡を継いで国王になる立場であるから、親代わりのマケドニア武將は既にその気で、アレキサンダーを見下すような発言をした。結婚披露宴の席である。さすがに先妻のオリンピアスは呼ばれなかったが、アレキサンダーは出席していたのである。

「無礼者め！」アレキサンダーが怒り、騒動が持ち上がった。既に酔っていたフィリポスは自分の結婚式を邪魔されたと思込んで剣を抜き息子に迫ったのだが、足元がふらついていてから途中で転んだ。アレキサンダーは退席する際に一同に言った。「…この状態を見よ。王はアジアへ進撃なさるおつもりだよのだが、この席の移動さえ転んでおられる…」こうしてアレキサンダーは母親前王妃を連れ、母の実家であるエピロス国に引き籠ってしまった。エピロス王は叔父である。

この出来事で当惑したのは「王の仲間」という特別な称号を与えられていた精銳部隊（親衛隊）の隊員たちである。フィリポスと共に既に戦闘に参加していたアレキサンダーを護る任務の者も居たから国王に付くか王子に従つか迷った。王子に従つとした者は国王から追放されたが、その数は多かったようである。後に許された彼らはアレキサンダーの側近として活躍することになる。

フィリポス二世と第二夫人との間には「カラノス」と言う安っぽい健康食品のような名前の男児（アレキサンダーの異母弟）が生まれた。しかし、その記録は少ない（フィリポスの死後、母子ともに誰かさんに消されたと考えるべきであろう）若いマケドニア女性（第二夫人）に男の子が生まれたとなると、フィリポス二世も呆けてはいられない。後宮引き籠りからようやく抜け出して自分が広げた大風呂敷の皺（しわ）を伸ばし始めた。懸案のペルシア遠征を実現させるためである。

戦争に勝つには有能な武將が必要である。フィリポスは恥を忍んで息子と前妻に詫言を入れた。神懸かりの母はペラ宮殿へ戻ってきた。そして前妻オリンピアスのご機嫌を取るつもりのフィリポスは、娘のクレオパトラをエピロス王であるオリンピアスの弟に嫁がせることにした。アレキサンダーの実妹である。このクレオパトラは、後の世で鼻の高さが世界的に問題になったクレオパトラでは無いので念のため…

紀元前三三六年の秋に、エピロス王とクレオパトラとの結婚を祝う盛大な宴が首都のアイガイの宮殿で行われた。その場所は六の章で述べたように古墳がやたらに存在するベルギナであろうと言われる。マケドニアの沖積平野を流れるハリアクモン川に沿って古墳群が有り、町は山沿いにあるのだが一段高い場所に崩れたままの宮殿跡が現在も残されている。その一角の劇場こそが宴（うたげ）の催された場所と考古学者が推定している。

正気を取り戻したフィリポス二世は、ペルシア侵攻を実現するように先発隊をトルコへ向かわせていた。その指揮官はアレキサンダーに不遜の態度を示した將軍（新王妃の伯父）である。そいつ

が居ないからトラブルは起こらない筈であった。

フィリポスは、結婚式で花嫁の父として良い格好を見せた後、直ちにアジアへ出陣するつもりでいたから、新調した派手な軍服を着て周りの招待客たちには、似合わない愛想を振り撒いていた。式場の周りは親衛隊の兵士たちが取り巻き、親衛隊長など数名の士官はフィリポスの近くにいた。

その当時の結婚式がどういう手順で行われたのか不明であるが、いわゆる祝いの席で酒も回り座も少し乱れかけた時に、親衛隊長が剣を抜くと物も言わずフィリポスを刺した。ずっと近くに居て狙いを定めていたのだから剣は一刺しで済んだ。この出来事には「悪酔いしたフィリポスが、自分の結婚式の時と同様に剣を抜いてアレキサンダーに迫ったのでこれをかばった親衛隊長が咄嗟に刺した」とする説もあるようだが怪しい。

そういう説が出るのは「この暗殺にアレキサンダーが関与していた」ことを示しているが、ほぼ正確な論として残るのは、離婚された前王妃オリンピアスの黒幕説である。後妻のエウリュディケと生まれた王子は、間もなく神懸かりのオリンピアスさんに消されたことがうかがえる。

事件は事件として小さな出来事のように処理されアレキサンダーは正式にマケドニア国王に推戴された。マケドニアの元老たちは国家安泰のために、すぐ戦争の指揮が執れるアレキサンダーを国王に推すしか方法が無かった。反対したであろう新王妃の伯父（將軍アッタロス）は、海の方こうで為すすが無かった。フィリポスの兄の家系から臨時の王とする人物まで見つけていたに…勿論自分の甥が王位に就くまでの暫定的な人事ではあるが…苦勞は全て報われず、アッタロスは真つ先



にアレキサンダーから攻撃されて終わった。

フィリポス二世暗殺の報はギリシア全土に知れ渡った。まず抵抗姿勢を見せたのはトラキアであったが、これは將軍アッタロス討伐のついでに鎮圧されてしまった。マケドニア新国王に就任した二十歳(はたち)の青年にとつて当面の敵となる三つの勢力のうち、残る強敵は父・フィリポスがコリントス市で強引に結ばせた「ギリシア同盟加盟諸都市(国家)」の離反者である。

フィリポスの葬式に香典と盗聴器を持つて参列した諸都市の代表は、後継者アレキサンダーの政治的基盤が不安定であり、かつ青二才のアレキサンダーがマケドニアの軍事力を完全に統率することとは出来ないであろうと判断した。今こそ、ギリシアの栄光を田舎者から奪い返すチャンス。この反乱計画に積極的だったのは、カイロネイアの戦いで敗れて、仕方なくコリントス同盟を結びフィリポス二世をギリシアの盟主選ばされたアテネ市とテーベ市である。性懲りも無くと言えるような計画を立ててアレキサンダーが相続したばかりのマケドニアへ侵攻する作戦を練っていた。

即位と同時に自分の立場が諺で言う「四面楚歌」の状態にあることを察知したアレキサンダーの対応は素早かった。先ず、軍隊を把握して自分の周りを固め、王位を狙う武將アッタロス(異母弟の伯父)を急襲して滅ぼし、トラキアなど北方民族の反乱を早期に平定し、不安定なギリシア都市国家の反発を抑えたのであるが、実は「の戦闘でアレキサンダーが戦死したらしい」という情報が主要都市国家にもたらされていた。

このネタを真つ先に信じたのは、昔、面倒をみたフィリポスに「恩を仇で返された」テーベ市で

ある。柵から特大の牡丹餅が落ちてきたような喜びで他の都市国家に反乱の決行を促すとともに自分たちもマケドニア侵攻の出陣式を行っていた。どういふ繋がりか、ペルシア帝国からも反マケドニアの資金が提供されていたとする説もある。

都市国家であるから、簡単なものだがテーベ市の周囲には城壁が回らされている。出陣の日に城の中で「エイ、エイ、オー」とか喚声を上げて、ふと城壁の一角を見ると、そこには既にアレキサンダーの率いるマケドニア軍が笑いながら立っていた。平均時速三〇kmで南下したマケドニア軍は他の都市国家には目もくれず真つ先にテーベ市へ攻め寄せてくれたのである。

フィリポス二世に抵抗した時も厳しい処分を受けたテーベ市は性懲りの無い再犯であるから助かりようが無い。ほとんどの施設が破壊され住民が奴隷にされ叩き売りで売却されてしまった。例外としてアレキサンダーの師アリストテレスの流れを汲む高名な詩人と家族、それにマケドニアに友好的だった僅かな者だけは除かれたらしい。壊された都市跡は、其の仮で現在も残っている。

「テーベの悲報」はギリシア人社会を震えあがらせた。此処に於いてギリシア人は「マケドニアの青二才」と馬鹿にしていたアレキサンダーが父親以上の冷酷無比な征服者であることを認識せざるを得ず、反抗運動はびたりと止んだ。テーベと密約を交わしていたアテネ市は掌(てのひら)を反して友好の使節団を派遣し破壊を免れた。

アレキサンダーは、フィリポスのようにコリントスに各都市(国)の代表を集め、改めて父親が決めた「ペルシア遠征」の実施を宣言した。同盟国には連合軍として軍事力の差出しが示された。

遠征を決定する前にアレキサンダーはギリシア人の慣習に従いデルフォイの神殿(五の章)に神託を伺いに行った。自分が神の子と思ひ込んでいるのだから、占いなどする必要も無いのに、青年は大それたことを仕出かす前に少し迷っていたのかも知れない。戦争の勝敗を預言するのが専門のデルフォイ神殿は時代が変わり景気が良くない。今やギリシアの覇者となつた若者は、お客さんとして「良い鴨」であるから「間違い無く大勝利」と言つて置けば良いものを、当日の当番だった巫女(みこ)さんは余程、気真面目な女性だったやうで規則どおりに「…生憎ですが今日は厄日ですから占いは出来ません…」と断つた。

デルフォイの神殿がある地域も実質的に自分の支配地になるので「俺は特別な客だ!」と思ひ込んでいたアレキサンダーは、無言で巫女さんの肩を抑えると強引に占いの場所まで連行し、恐ろしい顔で睨みつけた。ここで断つたら殺されるかも知れないと感じた巫女さんは、仕方なく石の上に座つて占いを始めようとしたのだが、腹の虫が収まらないから苦情のつもりで「…あなたには勝てない!」とつぶやいた。これは「あなたの強引さには呆れた」という意味で言つたのだが、アレキサンダーは勝手な解釈で「あなたは無敵だ!」とする神の言葉と受け取ってしまった。こうして無謀とも思える遠征が決められた。

歴史的には「アレクサンドロス(アレキサンダー)大王の東征」と呼ばれるアジア進撃が開始されたのは、紀元前三三四年の春からと推定されている。その壮大な遠征に従つて軍勢は歩兵が三万二千、騎兵が五千、艦船は百八十隻であった、海軍はアテネ艦隊が中心で、いつ寝返るか分からない。

陸軍部隊はマケドニア人を主力に、コリント同盟の加盟諸都市国家から差し出された兵も半分は人質のような形で含まれている。そのほか軍団には神官、学者、技術者から商人や売春婦まで大勢が従っていたと言う。国王が不在になる本国マケドニアには信頼する部下がマケドニア歩兵一万五千、騎兵千五百を率いて有事に備えた。

これらの兵力は、かつてペルシア帝国がギリシアへ侵入した際の兵力何十万単位に比べれば少ないかも知れないが、大規模な軍事力である。遠征軍はマケドニアのペラ宮殿に集結した。そこからトラキアを経由してエーゲ海北岸を東進し、イスタンブールまで行かずに黒海とエーゲ海の間にあるマルマラ海の出口に当る狭い海峡を越えて小アジア（トルコ）に足を踏み入れた。其処は多くのギリシア系植民都市が在るものの、ペルシアの領土である。多くのギリシア人は傭兵としてペルシア軍に加わっており、ギリシアから攻め込んだマケドニア軍にも傭兵を含めて多くのギリシア人が兵士として従軍している。海峡を渡った地点で複雑な関係の両軍は早くも衝突した。

アレキサンダーが攻めて来るといふ情報はギリシア本土のスパイから知らされていたから、ペルシア軍はマルマラ海南岸に待ち構えていた。現地のトルコ地図でも良く分らないような小さな川がマルマラ海に流れ込んでいて、多分、トロイ遺跡の東北にあるのがそれらしいのだが「グラニコス川」と言う。ペルシア軍はその東岸に布陣していた。苦勞をして海峡を越えて来るのだから海岸部で叩けば良いものを。尤も、あの海域に海岸らしい海岸は無かったかも知れないが、アレキサンダーが岸に着いた頃は日暮れも近かったし遠征軍

も強行軍で疲れていた。ペルシア軍はそのチャンスに敵が攻めて来るのを待っているだけだった。

ペルシア軍の兵力は歩兵と騎兵を合わせて四万と推定されている。歩兵の半分はギリシア人傭兵隊で、騎兵はプロの奥地遊牧民族である。このうち最初の戦闘で歩兵二万、騎兵二千五百を失ったと伝えられる。アレキサンダー側の戦死者は数えるほど少なかつたとか。当時は未だ鎧（あぶみ）が出来ていなかったようなので、騎兵は幾ら馬術が上手でも集団の戦闘となると訓練が物を言う。

ペルシア陸軍の中には、ロードス島出身のギリシア人傭兵隊長が居て、「攻め込んで来た連中は焦土作戦などで閉じ込めるようにしてペルシア陸軍は退き、その間に大艦隊をもってアレキサンダーが留守のマケドニアを攻めましょう」と作戦を進言したのだが、ペルシアの高官たちには聞いて貰えなかつた。そのために精鋭部隊の傭兵隊も積極的には動かなくなつたか？この作戦が実行されていたならばマケドニア守備隊（陸軍一万五千と騎兵千五百）は全滅し、都市国家もマケドニアに背いたであろうから戦況は変わっていた。

そういう状況下で、日没を前にした両軍が川を挟んで挨拶を交わした。遠征軍の一部は少し遅れて未だ到着していなかつたから、アレキサンダーの幕僚たちは「明朝を期して攻撃すること」を提案したのだが、傾いた秋の日が敵陣營を照らしているのを見たアレキサンダーは自ら川を渡り始めて騎兵隊もこれに続く。仕方なく歩兵も従つた。ペルシア軍も慌てたが、戦場は自分たちが布陣したグラニコス川の東岸に決まつたので、両軍は正に接近戦で死闘を展開したのである。

真つ先に川を越えた騎乗のアレキサンダーは忽ち

周囲をペルシア兵に囲まれた。騎兵は弓も持つが槍と短剣が武器である。奮闘するアレキサンダーの槍が折れた。短剣では大勢の敵と戦えない。これを見た部下の兵が駆け寄って槍を手渡した。

その隙をついて、ペルシア軍の総大将である貴族が偃月刀（えんげつとう）と言う反り返つた刃の大太刀を振りかざしてアレキサンダーに迫つた。気づいたアレキサンダーがこれを倒す。同時に総大将に付いていた武將が斬り付けた剣はアレキサンダーの兜に当り兜は飛んだ。頭部を強打されふらつきながら辛うじて堪えたアレキサンダーは馬から下りて敵將を刺した。そこへ刺された武將の兄弟である敵の將軍が剣を真つ直ぐにした状態で一気に駆けこんで来た。絶体絶命である。

これでアレキサンダーが刺されて戦死すれば世界の歴史は全く変わつていた筈なのだが、どこにでもお節介は居るものでアレキサンダーの危機を見た側近が、迫る敵の刺客を追つて背後からその腕を斬つたからアレキサンダーは命拾ひした。乱戦の中で主な將軍たちがアレキサンダーの周りで戦死したことが分かるとペルシア軍は少しずつ退却を始めた。乱戦は続いてしたが戦場に取り残されたペルシア軍は雇われたギリシア人の兵士だけになつてしまった。これをマケドニア人が主力の騎兵隊が攻撃したから傭兵隊は敗走した。

アレキサンダーの無謀とも思える仕掛けに始まり、危機一髪でアレキサンダーが生き延びたこの戦闘は「グラニコスの会戦」と呼ばれて、本来ならば歴史上の大きなポイントになる筈なのだが、記録されている史書は少ない。次に行われたのが有名な「イツソスの戦い」なので、その影に隠れてしまったのか、或いはアレキサンダーの若気の

至りで招いた危機（失敗）を隠すためのなのか：

かつてはギリシア系の都市国家が商売繁盛を謳歌していた小アジアは、かくしてペルシアの支配から次々と解放された。ところがサルデイス、エフェス、トロイなどの都市では喜んだが、ミレトス、ハルカリナッソスではペルシア軍に味方してアレキサンダー軍は抵抗を受けた。「解放」の美名に隠れても「他国への遠征」は「侵略」である。

それにはお構いなく一行はエーゲ海、地中海北岸を進み、現在のアンタルヤ市東部から北上しゴルディオンで遅れていた部隊と合流した。季節は冬になっていた。一年中戦争をしている現代と違って、当時は戦さにも「冬休み」があつたから、アレキサンダー様御一行もゴルディオンからアンカラ（現在のトルコの首都）付近にかけてのトルコ中部で冬眠していたようである。ゴルディオンの町には、アレキサンダーにまつわる有名な伝説「ゴルディオンの結び目」が残されている。

この町の神殿には縄で縛られた戦車（馬に引かせる古代の戦車）が置かれ、「この結び目を解く者は、アジアの王になれる」と言つて言い伝えなのだ。が誰もほくことは出来なかった。アレキサンダーも試してみたが同じことで、これからアジアに侵攻しようとする武将が不成功では困る。英雄とか王様は自分の都合が悪くなると怒って済ませるくせがある。アレキサンダーは立腹して剣を抜くと縄の結び目を切つてほくいた。（誰でも可能）

紀元前三三三年の春が来て、贅肉の付いた遠征軍は冬営地のフリユギア（トルコ中央部）を出発して地中海東北部沿岸を目指した。敵地ではあるがグラニコスの会戦に敗れたペルシア軍主力は遙か後方まで退いたようので、マケドニア軍はキプ

ロス島の北東方向にあるトルコの都市（現在）タルソスを占領するまでになった。

さて、いよいよペルシア帝国滅亡の序章となる（アレキサンダー帝国の幕開けとなる）「イツソスの戦い」に突入する訳であるが、戦さ上手とは言え、ギリシアの辺境マケドニアから思いつきで異国の地に侵攻したアレキサンダーが、概ね順調に戦果を挙げて来られたのは悪運の強さもある。

グラニコス会戦の命拾いもそうだが、一つには、先にペルシア軍の傭兵隊長が提案した「大艦隊でマケドニア本土を急襲する」案がようやく認められて敵の大軍は出撃に漕ぎ着け、アレキサンダーの居ないギリシアでは大騒ぎになった。ところが作戦提案者の隊長が急死して計画は挫折した。

もう一つには、山麓の町タルソスの気候変化でアレキサンダーは風邪をひき寝込んでしまった。この時に服薬による暗殺計画もあったのだがアレキサンダーはお構いなしに薬を飲み過ぎるほど飲んで風邪を治療し元氣を取り戻してしまった。

両軍にとって最初の決戦になるグラニコスの会戦での敗北はペルシア側にとって前衛が突破されたようなものだがそれほどの痛手にはならない。

数え切れない程の大軍が未だ王の手元にあり予備軍も温存していたから何処かの要衝で迎え撃ち、敵を全滅させれば良いのだが、指揮を執るペルシア帝国最後（第十一代）の国王ダリウス三世は、六の章で述べたように「王家傍流から探し出されて来た」血統から言えば怪しい国王である。

第十代のアルタクセルクセス三世は父親を暗殺して国王になり、自分も息子と一緒に家来に毒殺されたから王朝の直系に人が居なくなった。そこで日本の継体天皇のように、何処からか連れて来

られたのがダリウス三世である。優れた人物でも無かつたようので、優れない家臣団に囲まれて言われた通りのことをしていれば良かった。命がけの戦場にも豪華な馬車に乗り、妻子を伴つて来た。尤も王妃はペルシア第一の美女だとか：

紀元前三三三年の初夏にダリウス三世が自ら率いるペルシアの大軍はイツソスへ先行してアレキサンダーを待ち構えた。現在のシリアとの国境に近いトルコ領で地中海東北部沿岸に在り、ペルシアの中枢メソポタミアへ通じる街道の要衝に位置していた。ダリウスが布陣を予定した場所は小さい山脈と川とが、東進してくる敵軍の進路を塞ぐような地形であり南は海である。戦術上でも有利と考えられ護るペルシア軍が優位の筈であつた。

ところが、此処でもアレキサンダーの悪運が強く働き両軍の布陣が逆転することになった。用心のために北方で山を越え迂回して来るダリウスの大軍よりも早くアレキサンダーが現地に着し、川を渡り山地を背にしてペルシア軍を待ち受ける万全の態勢を整えてしまったのである。その代りにアレキサンダー軍の後方部隊は、ペルシアの大軍に邪魔をされて進めない状態になった。

アレキサンダーは困（おとり）として一隊を海側に配備した。此処は真つ先に狙われたが何とか持ちこたえていた。その間に騎兵を率いたアレキサンダーが山際から敵軍の中央部、つまり、ダリウスの馬車などが居る部分を攻撃した。

イタリアのナポリにある国立考古博物館には、どういふ経緯か知らないがポンペイの遺跡から出土した「イツソスの戦い」のモザイク画がある。

紀元前のもので、それにはアレキサンダーとダリウスの対決が克明に記録されている。それにより

イッソスの戦いの一番の見せ場が世界中に知れ渡っている。現場に到着早々で準備が整わなかったペルシア軍は、いきなり心臓部を攻撃されたから何万の軍勢が居よつとも負けである。

ダリウスは大腿部に傷を受け、救急軍代わりに乗って来た馬車に赤十字マークを付けて戦場を離脱した。美人の王妃ら家族を残して…これを見たペルシア軍は未だ十分に戦っていないが戦場が変わつたと勘違いして我先に移動ならぬ撤退を始めた。これで又もやアレキサンダーは大勝利を収めた。この勝利はペルシア帝国の実質的滅亡を意味し、当時の世界がアレキサンダーに帰したことを表わしている。アレキサンダーはダリウスの王妃らを丁重に迎え手厚くもてなしたとされる。王妃には母親似の王女が居り、その王女は後にアレキサンダーの第二夫人となる。

戦争では逃げた敵を追撃して敵地を占領するのが常道のようにあるが、アレキサンダーはペルシア帝国本土へは行かなかった。地中海東岸からエジプトなどの遠征に繰り出したのである。その間は約二年…これによりペルシア帝国はフェニキアの海軍力や地中海沿岸の権益を失い手足をまがれた状態になった。世界最古の国エジプトは、長らくペルシアに占領されていたから解放を喜び、アレキサンダーを神と崇めた。尤もこの国民は動物でも何でも神様にする癖があつた。

ダリウスは戦々恐々とした日々を送っていたが紀元前三三一年の秋に現在のイラク北部の都市モースル付近でエジプト帰りのアレキサンダーと対決した。ペルシア軍は多数の戦車(馬車)、象の大軍、駱駝の集団などサーカス団のような態勢で待ち受けた。しかし神様の国エジプトで神様扱いを

されたアレキサンダーは驚かない。山へ逃げたダリウス三世は側近の家臣に殺され、ペルシア帝国の膨大な財宝が征服者のものとなった。

アケメネス王朝ペルシア帝国の首都はスサとペルセポリスであつたが、古代オリエント社会で神の都、世界の都とされていたのがユーフラティス河中流域にあつたバビロンである。ダリウスを討つたアレキサンダーは、そのまま進撃して先ずバビロンを占領した。世界四大文明発祥地のうち、中国を除く地域がアレキサンダーの占領下に置かれたのである。古代オリエント学では、紀元前三〇〇年代に興つたアッカド王朝のサルゴン王に始まる古代東洋の世界は、このアレキサンダー大王の東征をもって終るとしている。

「かつてペルシア帝国の侵略をうけたギリシアが報復する」と言う大義名分で行なわれたアレキサンダーの東征は、偶々の幸運とペルシア軍の弱体化で予想外の成果を収めた。マケドニアと言うギリシアの田舎に生まれたアレキサンダー大王が既存の文明を持つギリシアを支配し、次いで東洋の大国ペルシアを滅ぼし新しい帝国を樹立した。これにより東と西の全く違う世界が融合して独特の文化「ヘレニズム(オリエント風のギリシア文化)」が形成されることになる。

アレキサンダーは征服した土地に留まること無く一部の軍人と同行した商人などを置いて新しい町を造らせ、自らは統治せず東征を続けた。東はインド、西はエジプト、北はウズベキスタン、南はパキスタン…行く先々に抵抗が無かつた訳ではない。インダス河を越える際には地元王朝勢力の象部隊に攻められて兵士が進まなくなった。略奪も放火も虐殺も行われた。イランの建国二千五百

年祭が行われたペルセポリス(参の章)はアレキサンダーが酔つて遊女と戯れながら放火したと言われている。(酔いが醒めて後悔したよつだが)

紀元前三三九年、アレキサンダーは現在のアフガニスタン北部で冬を越してペルシアの残党と戦い、また隊商民族のソグド人の抵抗に手を焼いていた。結局、ソグド貴族の娘であるロクサネ(ダリウス王妃に次ぐ東洋の美女)と結婚して同盟関係を築き再び進撃を開始してインダス河を越え、そこで兵士らの進軍拒否に遭つた。いつ終わるか分からない遠征に不平不満が高じてきたのである。

## ギター文化館

### 2010 CONCERT SERIES

来年はギター文化館が開設して18年になります。来年も魅力いっぱいコンサート・シリーズを予定しております。御期待下さい。

1月24日(日) PM3:00~北口功ギターリサイタル

1月27日(水) PM6:00~桑山哲也LIVE

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628